

琉球病院 Monthly



独立行政法人
国立病院機構 琉球病院
National Hospital Organization RYUKYU Hospital

Vol.102
2021. July

発行者 琉球病院事務部長
花木 成信

基本理念 この病院で最も大切なひとは医療を受ける人である

医療安全研修「MRI 検査を安全に行うために」

診療放射線技師長 吉本 博明

MRI 検査を行うには多くの危険が伴う。患者さんの生命・身体に危害を及ぼすもの、看護師スタッフに危害を及ぼすもの・そして装置を壊す事等、そのリスクを取り除くには何が必要か、正しく知ること正しい知識を得ること以外リスクを取り除くことはあり得ないと思う。

それには「分らない事を認識すること」が大事なことである。分かっているつもり、何だか分かっている、分っているように解釈する、それだと間違っただけで間違っただ事を積み重ねる事になりかねない。

「分らないことを謙虚に分かる・認める」ことにより学びのスタートラインにたつことができると思う、同僚に聞く・ネット等で調べることでプラスのベクトルで正しい知識を積み重ねる事になる。

「心臓ペースメーカーはMRI 検査で何故禁忌なのか」、一つの要因としてペースメーカーのリセットが引き起こされる可能性がありプログラム変更により心室頻拍や心室細動が誘発される可能があり患者さんの生命に危険を及ぼすリスクがある、電子機器等は高磁場の中で狂いが生じる。

ポスターで「心臓ペースメーカー危険」MRI 室入り口に表示があっても「正しい知識」を得ていなければ絵に描いた餅に過ぎないと思う。

2021年6月10日に琉球病院の2階会議室において医療安全研修会「MRI 検査を安全に行うために」が開催されました。

看護職員を中心に事務系・コメディカル総勢23人の参加で、冒頭「点滴スタンド・ハサミMRI装置吸着動画」から始まり、パワーポイントによる研修・最後に放射線科MRI室に移動し吸着体験にて完了致しました。

動画を見て衝撃を受けたこと・MR室での吸着体験「凄く引っ張られたこと」は忘れることは無いと思います。視覚・体験は、記憶の要素において重要だと思います、MRI室での吸着体験希望される方は是非ご連絡ください、歓迎します。

今後、スタッフがMRI専用以外の車イスでMRI室に入室・ポケットにハサミを入れたままMRI室に入室・腕時計をつけたままなどんでもない、正しい知識に基づいて「患者さんにリスクを与える側」ではなく最低限「患者さんを守る側」になって欲しいと思います。

今後とも放射線科・他部署間連携し医療安全・患者サービス・楽しい職場環境の向上に取り組んでいきたいと思っておりますので宜しくお願い致します。

● 地域医療連携室だより

琉球病院では、受診相談や地域、行政、他医療機関からの窓口として地域医療連携室を設置しております。一般精神をはじめ、アルコール依存症を含むアディクション全般、治療抵抗性統合失調症治療薬で効果のあるクロザピンによる治療、認知症、児童思春期外来といった様々な疾患をお受けできる診療体制を整えております。また、中北部圏域を中心とした地域の皆様によりよい質の医療を提供し、適切な対応ができるよう充実した取り組みを行い、地域のニーズに応えられるよう日々努力していきたく思っております。初診はじめ、受診については予約制となっております。

ご相談はお気軽に地域連医療携室までお問い合わせください。

院長

ふくじ やすひで
福 治 康 秀



1964年生まれ、那覇市出身、首里高校卒。1993年琉球大学医学部卒、琉球大学医学部精神神経科入局。95年那覇市立病院精神科、96年琉球大学精神神経科、2009年琉球病院精神科部長、2010年副院長を経て2014年琉球病院長に就任。日本病院・地域精神医学会理事。琉球大学医学部 臨床教授。

診療科

- ・一般精神科
- ・こども心療科
- ・物忘れ外来
- ・アルコール依存症等外来

病床数

416床

- ・精神 151床
(一般精神・クロザピン専門・精神科救急)
- ・認知症治療専門 56床
- ・アルコール依存症 54床
- ・児童思春期ユニット 4床
- ・重症心身障がい 90床
- ・医療観察法 37床



路線バス 那覇BS(下り)または名護BS(上り)より沖縄バス[77番名護東線]浜田バス停下車徒歩3分

自動車 那覇市から40分沖縄自動車道金武インターから名護向け5分

お問い合わせ

時間 8:30 ~ 17:15
(土・日・祝日・年末年始以外)
TEL 098-968-2133(代)
内線 231・234

地域医療連携室(直通)

TEL 098-968-3550
FAX 098-968-7370

治療抵抗性精神疾患への医療

医師 木田 直也



クロザピンの治療状況

治療抵抗性統合失調症の患者さんに対して、当院では2010年2月からクロザピン（CLZ）治療を開始し、全症例は延べ354例になりました。2021年5月のCLZ導入は5例で、このうち4例は他の医療機関からご紹介をいただいた入院中の患者さんでした。CLZ治療前には暴力行為や多飲水などの問題行動のために隔離や身体拘束が必要な患者さんも多くいらっしゃいましたが、CLZ継続例では問題行動も消失、もしくは軽減し、隔離や身体拘束は、ほとんどの症例で解除できています。週に3回のCLZ専門外来も行っていますので、患者さんのご紹介をお願いします。当院でのCLZ治療や沖縄県での地域連携の実際については、ノバルティスファーマ社の医療関係者向けサイトのクロザリル/クロザリルのご使用にあたって(<https://drs-net.novartis.co.jp/dr/product/clozaril/guide/>)でも動画が公開されていますので、ご参照ください。

こども心療科

心理療法士 仲間 信也

5月25日（火）に宮古島市教育委員会との共催で、宮古島市の教育関係者を対象とした研修会を開催しました。当初は現地で開催を行う予定でしたが、新型コロナウイルスが感染拡大している状況を踏まえ、オンライン形式での開催となりました。

今回のテーマは「発達障がいと虐待」で、こども心療科の原田医師が講師を務めました。参加者は78名で、小中学校の教員、スクールソーシャルワーカー、保育士、心理士、保健師、社会福祉士など、様々な職種の参加がありました。

児童虐待は、保護者、子ども、家庭を取り巻く環境（例：経済的問題）等が複雑に絡み合っていますが、特に発達障がいの特性を持つ子が虐待に遭うリスクは高いと言われています。今回の研修を通して、教育関係者が発達障がいの特性を有する子が抱える虐待リスクを理解することで、予防・早期発見・早期介入の一助になることを願っております。

今後も、子どもたちの健やかな育ちを支える地域づくりに向け、関係機関と連携して取り組みを進めていきます。

認知症医療

東Ⅲ病棟棟師長 平良 恵

我が国の総人口（2020年9月15日現在総務省統計局推計）は、前年に比べ29万人減少している一方、65歳以上の高齢者人口は、3,617万人と前年に比べて30万人増加し、過去最多となっています。高齢者人口の増加に伴い、認知症患者の数も増加傾向にあります。厚生労働省の推計によると、2025年には全国で認知症高齢者が約700万人になると見込まれています。

沖縄県では、介護保険の要介護認定者のうち、認知症の方は4万人を超えています。認知症になっても住み慣れた地域で安心して暮らせる取り組みとして、県内には6カ所の認知症疾患医療センターが運営されています。認知症になると本人は何も分からない、何もできないというわけではなく、地域で暮らす周囲の理解とサポートがあれば地域で暮らし続けることは可能です。

当院では、医師・看護師・精神保健福祉士・作業療法士・心理士など様々な専門分野の意見を取り入れながら、認知症の入院治療を終えた後の療養環境についても検討を行っています。認知症の診断や治療のみならず、生活支援に関する相談などがあれば、地域連携室までご連絡ください。

重症心身障がい医療

療育指導室長 金城 安樹

重症心身障がい児者の入所支援のあり方については、平成29年、厚生労働省全国障がい保健福祉主管課長会議において「特例措置を恒久化する」旨の方針が示され、「児者一貫制の維持・継続」が決められました。児童施設と成人施設の区分を行わない旨の方針であり、施設の共用及び職員の仕事が認められ、児施設と成人施設の定員を区分しない事があげられます。前提条件として「入所者の年齢や状態に応じた適切な日中活動の提供」が示されています。

日中活動の提供及びサービス管理業務は療育指導室業務の大部分を占めます。重症心身障がい児者への支援には様々な職種が関係し総合的な療育が提供されます。療育は多職種の営みによって提供するものであり、多職種連携が重要となります。今後も多角的な視点から利用者支援の質向上に取り組んでまいります。

アルコール・薬物依存医療

北Ⅰ病棟棟師長 長 祥子

依存症治療プログラムでは平日は毎日、ミーティングや創作活動を行っています。暑い季節ではありますが、水分補給をしながら院内の畑で作業もしています。最近、院内のパナナを収穫し、ジュースを作って試飲会が行われていました。私は、後で試飲させていただきました。甘くて美味しかったです。

依存症の方は飲酒が続くことで、普通に生活ができない状況になります。長期の多量飲酒は脳の報酬系に異常をきたしてしまい、気分の落ち込みやイライラが募りやすくなるといわれています。患者さんが、入院生活でシラフの状態楽しく生活する体験をし、心身の回復ができるよう取り組んでまいります。

包括的地域精神医療

訪問看護師長 嘉手刈 美智留

現在、訪問看護の登録者数は283名で、新規の申し込みは4月から6月にかけて15名となっています。北は国頭から南は浦添まで訪問に出向いています。

新型コロナウイルス感染予防のため訪問看護をお断りされる方もおられ、電話で事前に体調確認とともに伺って良いかもお尋ねするようにしています。

5月の中旬より、地域別に看護師を固定しエリア別の訪問看護を試行してみました。固定して関わることで、利用者やご家族の様子が把握しやすいことや、信頼関係の構築に繋がること、訪問抜けが防げるなどの利点が見えてきました。マンパワーが不足しがちな日々の中、スタッフも奮闘しています。夏本番で暑くなりますが、訪問看護スタッフの思いも熱く、利用者の良き相談役となり、現場の士気が高まることを願っています。

臨床研究部活動状況

医師 木田 直也

『Clozapine の地域連携「沖縄モデル」とモニタリング体制』

琉球病院（以下、当院）では延べ325人の治療抵抗性統合失調症患者にclozapine（CLZ）治療を行いました。このうち185例（57%）は紹介例でした。当院は専用のクロザピン治療病棟を有し、他施設から患者さんの紹介を受け、CLZ導入を行い、退院後は紹介元病院に通院するという沖縄モデルの拠点です。CLZパスを使用し、心エコー、トロポニンT、脳波などをモニタリングすることで安全性を担保し、多職種による手厚い心理社会的治療を行うことで重度の精神症状を有する患者さんも退院が可能となります。専門スタッフや整備された院内体制を持った拠点病院が導入期の治療を担うことは、CLZの効果を最大化し、有害事象を最小限に抑えるために最適です。CLZ開始1年後には無顆粒球症等の有害事象の発現は少なくなるため、先進国と同様に4週に1回の血液検査に緩和することが患者さん・ご家族と医療関係者の負担の軽減とCLZ治療の普及につながると考えられました。

「臨床精神薬理」24:239-248, 2021 抄録より一部抜粋